

●大阪大学 基礎工学研究科システム創成専攻

「システム創成プロフェッショナルプログラム」の事例 <理工農系>

具体的に何を実施し、何が困難であったのか

嬉しいことに、海外研修、国際会議参加研修への参加に対して非常に満足をお憶え帰国した学生が、他学生、後輩学生へ積極的な海外学術経験への参加を勧誘してくれた。しかし、このため海外渡航の希望者が年度が進むごとに増え、最終年度では、人件費を除いた予算のほとんどをこの海外研修に投入せざるを得なくなった。高度プロフェッショナル人材、グローバル人材の養成の観点で、学生が獲得した行動規範と学習意欲は極めて大ではあったが、予算負担もかなり大きく、他の活動を抑制せざるをえなくなったことが課題となった。また、学生の海外研修、国際会議参加研修の人数が増えるに従い、英語力、海外渡航の事前準備や異文化、近現代史への心構えが不足している学生が紛れ込むようになり、その対応に苦勞した。

苦勞したこと、困難であったことの具体的な要因は何だったのか、それにより実施内容がどのような影響を受けていたのか

海外滞在中の学生の安全の確保は常にプログラムの最重要事項の一つとして位置づけていたが、平穩な日本でこれまで過ごし、海外に出たことのない学生に対して、海外渡航リスクを実感させること、またそれが所属領域、所属研究室でばらつきが大きいことに困難さがあった。安全の確保という観点、多くの学生に海外研修、国際会議参加研修へ参加させたいという観点の両方から、一見、学生には贅沢に見えるが、旅費の十分な確保も困難な要因の一つであった。

どのように対応し、そのような結果が得られたのか、また、その結果が望ましいものではなかった場合、あらかじめどのように対応していれば適切であったのか、どうすればより良い結果を導くことができたのか

幸い、本プログラムで海外滞在中にトラブルにつながった例はなく、学生の評価や感想に問題点の指摘は出てきていない。国際交流委員会が作成した海外渡航マニュアルを配布するなど、安全確保に慎重に対応したが、安全へのリスク管理・対策の一層の徹底に上限はないため、派遣する側の教員の不安はなくなるものではない。海外安全教育は一教育プログラムが行うというより、今後は全学的組織あるいは大学間共通組織を立ち上げ、そのような組織の専門家が効率的に行うことが適切と思われる。